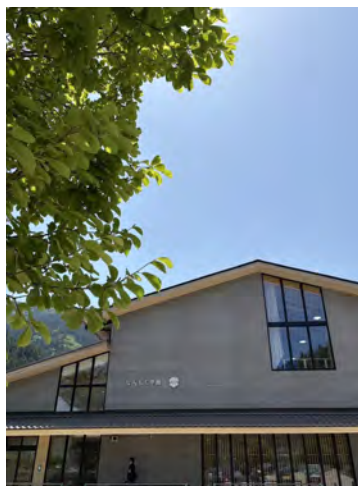


なんもく

学園

綾 亨

南牧村は、群馬県南西部、長野県との県境に近く、標高差のある山間地に『川とともにある地域愛』（吉見一之）を感じさせ、昔ながらの日本の農村風景が色濃く残る集落です。全国一の高齢化率69%でも知られ、人口は1223人（令和8年5月時点）、児童・生徒は16人とのこと。



えっ？
これが学校？

一見すると老舗の宿のような木造平屋のがつしりした建物が目に入ります。玄関に入ってもまだ、学校とは思えない独創的な造りです。中に入って見てまわると、アリーナ（体育館）、図書コーナー、壁がない教室らしきスペースなどがあり、児童・生徒と教員の姿が見え、『やっぱりここは学校だ！』（綾亨）と言い聞かせました。

議員各自が校長・教育長・教職員らと校内各所で話を交わしました。『創意を凝らした校舎に驚きを感じつつ、児童・生徒の減少が気にかかる』（大沼由美子）現状も存在しました。



『教育は、未来への投資である』（前田勝利）『コンパクトな校舎で、少人数で使い勝手が良い感じ。まだ2年、今後が楽しみ』（青沼弘）であり、南牧村の未来として、歴史を重ねることを願います。

保護者・住民の 理解・支援が 決め手

住民から「人口が減少するのに新しい校舎をつくるのはどうか？」との声



えます。『教育委員会が、住民・議員ら全方向へ理念を語る姿勢が土台』（木村諭史）となっていることを共有したいと思います。

この地域の宝として永く残るものと思います。今後の、新島村式根島の学校の在り方を考えるうえで、貴重な知見を得ることができました。

もあつたと話されていきました。保護者・住民の理解、支援を得ることに力を注ぎ、この事業を一步一步進めてきたことが伺

地域の 大切な「宝」

新たな校舎で新たな歴史が始まりました。開校に至る過程で、校名・校章・校歌を公募し、審議を得て決定したと聞きます。『このプロセスは地域の結束を強める重要な役割を果たした』（小久保利佳）と確信しました。